

心眼

三遊亭円朝

青空文庫

さてこれは外題げだいを心眼しんがんと申まうす心の眼めといふお話でござります
 が、物の色を眼めで見ましても、只赤ただあかいのでは紅梅こうばいか木瓜ぼけの花か薔ば
 薇らか牡丹ぼたんか分わかりませんが、ハ、ア早咲はやぎきの牡丹ぼたんであるなど心で受
 けませんと、五色しきも見分みわけが付つきませんから、心眼しんがんと外題げだいを致し
 ましたが、大坂町おほさかちやうに梅喜ばいきと申まうす針匠はりいがございましたが、療治れうち
 の方は極下手はうごくへたで、病人はりに針を打ちますと、それがためお腹なかが痛く
 なつたり、頭痛かへつの所へ打ちますと却て天窓あたまが痛んだり致しますの
 で、あまり療治れうちを頼たのむ者はありません。すると横浜よこはまの懇意こんいな人
 が親切よこはまに横よこ浜はまへ出稼でかせぎに来くるが宜いい、然さうやつてゐては何時いつま
 でも貧乏ひいきづよしてゐる事では成ならん、浜はまはまた鼻肩ひいきづよ強い処ところだからと

云つてくれましたので、当人も参る氣になりましたが、横浜へ参るには手曳がないからと自分の弟の松之助といふ者を連れまして横浜へまゐりまして、野毛の宅へ厄介になつて居り、せめて半年か今年一年位稼いで歸つて来るだらうと、女房も待つて居りますと、直に三日目に歸つてまゐりました。鼻の尖頭へ汗をかき、天窓からポツポと煙を出し、門口へ突立つたなり物も云ひません。女房「おやお前お歸りか。梅「い……今歸つたよ。女房「おや何うしたんだね、まア何うも余り早いぢやアないか、浜へ往つて直ぐに歸つて来たの。梅「直ぐにたツて居られねえもの、どうも幾許居たくつても居られません、あまり馬鹿馬鹿しくつて口惜しいたツて口惜しくねえたツて耐らないもの……。

と鼻息荒く思ふやうに口もきけん様子。女房「何うしたんだね
 え、まア何だね。梅「何うしたつて、フン／＼あの松ン畜生
 め……。女房「松さんが何うしたんだえ。梅「彼奴が、己を置去
 りにして先へ歸りやアがつたが、岩田屋さんは親切だから此方へ
 来な、浜は鼯肩強えから何でも来ねえと仰しやるので、他に手曳
 がねえから松を連れていくと、六畳の座敷を借切つてゐると、火
 鉢はここへ置くよ、烟草盆も置くよ、土瓶も貸してやる、水
 指もこゝに有るは、手水場へは此処から往くんた、こゝへ布巾
 も掛けて置くよ、この戸棚に夜具蒲団もあるよと何から何まで残
 らず貸して下すつてよ、往つた当座だから療治はないや、退屈
 だらうと思つて岩田屋の御夫婦が来て、四方山の話をして居ると、

松が傍まつそばで土瓶どびんをひつくりかへして灰神楽はいかぐらを上げたから、氣きを附つける、粗忽そこつをするなつて他人ひとさまの前まへだから小言こごとも云いはうぢやアねえか、すると彼奴あいつが己おれにむかツ腹ばらア立たつて、よく小言こごとをいふ、兄あにいづ振ふつたことを云いふな、己おれが手てを曳ひいてやらなけりやア何処どこへも往いかれめえ、御飯おまんまの世話せわから手水場てうづばへ往いくまで己おれが附ついてツてやるんだ、月げつき給ふを取るんぢやアなし、何んぞと云いふと小言こごとを云いやアがる、兄あにきもねえもんだ、兄あにきたぬき(狸)の腹はら鼓つづみが聞きいて呆あきれと吐ぬかしやアがるから、やい此こン畜生ちくしやう、手前てめえは懶惰者なまけもんでベんくくと遊あそんでゐるから、何処どこへ奉公ほうこうに遣やつたつて置いてくれおれる者ものもないから、己おれが養やしなつて置くからには、己おれの手てを曳ひくぐらゐあは当あたり然まいだ、何なにを云いやアがるつて立上たちあがつて戸外そとへ出でたが、己おれ

も眼めが見えないから追掛おつけて出ても仕様しやうはなし、あんな奴やつにまで
 馬鹿ばかにされると腹はらを立つのを、岩田屋いはたやの御夫婦ごふうふが心配しんぱいして、なに
 松まつさんだつて家うちへ帰かへれば姉あねさんに小言こごとを云いはれるから、帰かへつて来く
 るに違ちがひない、なに彼奴あいつは銭ぜにを持もつてゐる氣遣きづかひは有ありませんから、
 ステイシヨン停てい車場しやうへ往いつたつて切符きふを買かひふ手当てあてもありませんから、いまに
 帰かへりませうと待まちつたが、帰かへつて来こねえ、処ところで悪い顔かほもしず、御飯ごはん
 の世話せわから床とこの揚あげ下おろしまで岩田屋いはたやさん御夫婦ごふうふが為して下くださるんだ
 が、宜い氣きになつて其様そのんなことがさせられるかささせられねえか考か
 へて見ねえ、とてもそれなりに世話せわに成なつてもゐられねえから帰かへ
 つて来きたのよ。女房ほんたう「本ほん当たうに困こまるぢやアないかね、私わたしも義理ぎりあ
 る間なかだから小言こごとも云いへないが、たつた一人ひとりの兄にいさんを置去おきざりにし

て歸つて来るなんて……なに屹度^{きつといま}早晩にぶらりと歸つて来るのが
落^{おち}だらうが、嚙^{さぞ}腹が立つたらうね。梅「腹が立つたつて立たねえ
ツてえ、詰^{つま}らねえ事を腹^{こと}ア立てやアがつて、たつた一人の血を分
けた兄の己^{おれ}を置^{おきざ}去りにしやアがつてよ、是^これと云^いふのも己^{おれ}の眼^めが
悪いばかりだ、あゝ口^く惜^やしい、何^どうかしてお竹^{たけ}や切^せめて此^この眼^め
を片^{かた}方^くでも宜^いいから明^あけてくんなよ。女房「明^あけてくんなどと云^い
つて、私^{わたし}ア医^い者^{しや}ぢやアなし、そんな無理なことを云^いつたツて私^{わたし}が
お前^{めへ}の眼^めを明^ある訳^{わけ}にはいかないが、苦しい時の神^{かみ}頼^{だの}みてえ事も
有^あるから、二人で信^{しん}心^{しん}をして、一生懸命になつたら、また良^い
いお医^い者^{しや}に出^で会^あふことも有^あらうから、夫婦で茅^か場^{やば}町^{ちやう}の薬^{やく}師^しさま
へ信^{しん}心^{しん}をして、三七、二十一日断^{にちだん}食^{じき}をして、夜^よ中^{なか}参^{まゐ}りを

したら宜^よからう。と是^{これ}から一生懸命に信^{しん}心^{しん}を始めました。す
 ると一^{いつしん}心^{とほ}が通りましてか、満^{まん}願^{ぐわん}の日に梅喜^{ばいき}は疲れ果て、賽^さ
 錢箱^{いせんばこ}の傍^{そば}へ打倒^{ぶつたふ}れてしまふ中^{うち}に、カア／＼と黎明^{しのゝめつぐ}告^{からす}る鳥諸^も
 ろとも共^{とも}に白^{しら／＼}々と夜^よが明け離^{はな}れますと、誰^{たれ}やらん傍^{そば}へ来て頻^{しき}りに揺^ゆ
 り起^{おこ}すものが有^あります。×「梅喜^{ばいき}さん／＼、こんな処^{ところ}に寐^ねて居^ゐち
 やアいけないよ、風^{かぜ}え引^ひくよ……。梅「はい／＼……。眼^めを擦^{こす}り
 こつち此方^{こつち}を見る」×「おや……。お前^{まいめ}眼^めが開^あいたぜ。梅「へえ／＼……。成^な
 るほど程^{ほど}……是^{これ}は……。あゝ（両^{りやう}手^てを合^{あは}せ拝^{をが}み）有^あ難^{りがた}う存^{ぞん}じます、
 南無薬師瑠璃光如来^{なむやくしるりくわうによらい}、お底陰^{かげ}を以^もちまして両^{りやう}眼^{がん}とも明^{あきら}かに
 なりました、誠^{まこと}に有^{あり}難^{がた}う存^{ぞん}じます……。成^{なる}程^{ほど}ウ是^{これ}は手^てでござい
 ますか。×「然^さうよ。梅「へえ／＼巧^{うま}く出来^{でき}てゐますね。×「お前^{まへ}

どうして眼めが明あいたんだ。梅「へえ実は二十一日断食にちだんじきをしまし

た、一心しんが届とどいたものと見えます。×「ム、ウ、まゝ此位このくらゐな

目出度めでたい事はないぜ。梅「へえ誠に有難ありがたう存ぞんじます……あなた

は何方どちらのお方かたで。×「フ、何方どちらだつて、お前毎まへまいにち日のやうに宅うち

へ来てきえるぢやアねえか、大坂町おゝさかちやうの近江屋金兵衛あふみやきんべゑだよ。梅「へえ、

是これは何どうも誠にへえ……あなたは其様そのんなお顔でございましたか。

近江屋「フ、其様そのんなお顔と云いふものもねえもんぢやアねえか、

何なににしても眼めの明あいたは共に悦よろこばしい、ま結構けつこうな事で。梅「へ

え有難ありがたう存ぞんじます、毎度また御鼻肩ごひいきになりまして……これは何なん

です、一体たいにかう有あるのは……。近江屋「成程なるほどな、眼めのない人

が始めて眼めの明あいた時には、何尺何間なんじやくなんげんが解わからんで、眼めの前さき

へ一体たいものに物が見えろと云いふが、妙めうなもんだね、是これは薬師やくしさまのお
 堂だうだよ。梅「へえ、お堂だうで、是これは……。近江屋「お賽銭さいせん箱ばこ。
 梅「成程なるほど皆みんなながお賽銭さいせんを上げあるんで手つを突つ込こんでも取れない
 やうに……巧うまく出来できて居あますなア……あの向むかうに二つ吊ぶら下さつて居あま
 すのは……。近江屋「あれは提灯ちやうちんよ。梅「家内かないなどが夜点よるけて歩
 きますのは彼あれでげすか。近江屋「なに、それはもつと小さい丸
 いので、ぶら提灯ちやうちんといふのだが、あれは神前しんぜんへ奉納ほうなふするので、
 まはりまはりあかぬつづなく、中なかへ墨くろで「魚うをがし」と書いてあるのだ、
 周囲まはりは真ま赤あか中は真まツ黒くろ。梅「へえ、真まツ赤あか……真まツ黒くろ旨うまく名なけ
 ましたな、成程なるほど真まツ赤あからしい色いろで……彼あれは。近江屋「彼家あれは
 宮松みやまつといふ茶屋ちややよ。梅「へえ……これは髻しきいし石いしでございませ

う。近江屋「おや／＼よく解わかつたね。梅「へえ是これは下駄げたを履はいて通とほると、がら／＼音がしますから解わかりますが、是これは盲まうじん人が歩しやなきいゝやうに何処どこへでも敷しいて有あるのでせう。近江屋「なアに社しゃな内いばかりだアね、そろ／＼出掛でかけようか。梅「へえ有ありがた難ぞんう存ぞんじます、只今杖たゞいまつゑを持つてまゐりませう。近「もう杖つゑも要いらねえから薬師やくしさまへ納をさめて往いきな。梅「へえ誠まことに有ありがた難ぞんう存ぞんじます：へえ／＼何どうも日に本晴つぽんばれがしたやうだてえのは、旦那だんなさま此このこ事とでございませう、本ほん当たうに有ありがた難ぞんいことことで。近「まア芽出度めでたかつた。梅「旦那だんな々々《／＼》これは何なんでげす。近「生薬屋きぐすりやの看板か板ばんだよ。梅「あれは……。近「糸屋いとやの看板かんばんだ。梅「へえ／＼：あれは。近「人ひとが見て笑わらつてるに、水菓子屋みづぐわしやだ。梅「へえ／＼：

…あ彼処あそこに在るある円えんいものは何なんです、かう幾いくつも有あるのは。近「あ
 れは密柑みかんだ。梅「あの色は何なんと云いふんです。近「黄色きいろいてえのだ。
 梅「へえ、……密柑みかんには異ちがつたのが有ありますなア、かう細ほそ長ながい
 やうな。近「フ、あれは乾柿ころがきだ。梅「乾柿ころがき、へえ、彼あれは。
 近「第一の銀行よ。梅「成程なるほど噂うわさには聞きいて居をりましたが立派りっぱな
 もんですね……あれは。近「橋はしだ、鎧よろひ橋はしといふのだ。梅「へ
 え、立派りっぱな物ものですどね何なんうも……あの向むかうへ往いきますのは女をんなぢやア
 ございせんか。近「然さうよ。梅「へえ、女をんなてえものは綺きれい麗れいなも
 のですなア、男をとこが迷まよふな無理無理もありませんね。近「あれは何どこ処ところか
 の権妻ごんさいだか奥おくさんだか知しれんが、人柄ひとがらで別べつ嬪びんだうの。梅
 「へえ、綺きれい麗れいなもんですなア、私わたし共どもの家内かないは、時々とき／＼私わたしが

あなたとところ
 貴方の処へお療治に参つて居ると迎ひに來た事もあります、私
 にようぼう
 の女房は今のやうな好い女ですか。近「ウフ、アハ、
 ばいき はら
 梅喜さん腹ア立つちやアいけないよ、お前ん処のお内儀さんは失
 つけい あま きりやう
 敬だが余り器量が好くないよ。梅「へえ、何んな工合ですな。
 近「フ、何んな工合だツて……あ彼処へ味噌瀉を提げて往く何
 こ やとをんな あ
 処かの雇ひ女が有るね、彼よりは最う少し色が黒くツて、ずんぐ
 りしてえて好くないよ。梅「彼より悪うございますと、それは恐
 それい
 入りましたな、私は美人だと思つてましたが、器量の善悪
 なで
 は撫たツて解りません……あ……危えなア、何んですなア……是
 は……近「人力車だ。梅「へえ、眼の見えない中は却つて驚き
 ませんでした、何うでも勝手にしねえと云ふ氣が有りましたから、

眼めが明あいたら何なんだか怖こはくツて些ちつとも歩あけません。近「それぢやア
 くるまの車に乗せよう、然さうして浅草あさくさの觀くわんおん音おんさまへ連つれて往ゆう。と
 是これから合乗あひのりで、藏前くらまへ通りから雷神門かみなりもんの際きはで車くるまを下おり、近
 「梅喜ばいきさん、是これが仲見世なかみせだよ。梅「へゝえ何処どこウ……。近「なア
 にさ、ここが觀くわんおん音おんの仲見世なかみせだ。梅「何なにかゞございませう玩おも具ち店せが。近「べた玩具店おもちやみせだ。梅「どれが……。近「あの種いろん々
 なものを玩具おもちやと云いふのだ。梅「へえゝ……。種々いろんな物ものが有あります
 な、此このあひだ間やまだね山田やまださんの坊ぼつちゃんもが持もつていらしたのを私わたしが
 握にぎつたら、玩具おもちやだと仰おつしやいましたが、成程なるほどさま／＼の物もの
 が有ありますよ、此方こつちも玩具おもちや……彼方あつちも玩具おもちや、其その隣となりも玩具おもちや、
 あゝ玩具おもちやを引張ひつばつて伸のばして居をります。近「フゝ、あれは飴あめやだ

よ。梅「へえ、なるほど成程、此方こつちは。近「人形屋。梅「向うむかのは。

近「料理茶屋萬梅れうりぢややまんばいといふのだ。梅「あら〜。近「見ともねえみつ

なア、大きな声こゑであらあらと云いひなさんな。梅「あれは。近「絵え

草紙ざうしだよ。梅「へえ、綺麗きれいなもんですな、撫なでて見ちやア解わかりませ

んが、此このあひだ間池田いけださんのお嬢ぢやうさまが、是これは絵えだと仰おつしやいまし

たが解わかりませんでした。梅「お、突つき当あたりやがつて、氣きを附つけろ

い、盲人めくらに突つき当あたる奴やつが有あるか。近「眼めが明あいて居ゐるぢやアな

いか。梅「へ、今日けふ明あきましたんで、不ふ断だん云いひ慣つけて居ゐるもん

ですから。と云いひながら両手りやうてを合あせ、梅「南無大慈大悲なむだいじだいひの觀くわん

世音菩薩ぜおんぼさつ……いやア巨おほきなもんですな、人めくらが盲めくら目だと思おもつて欺だま

すんです、浅草あさくさの觀音くわんおんさまは一すん寸ぶ八分だつて、虚言うそばツか

り、巨おほきなもんですな。近「そりやア仁王門だ、是これから観くわんお音んさまのお堂だうだ。梅「道理だうりで巨おほきいと思ひました……あゝ……
 危あぶない。と驚おどろいて飛とび下さがる。近「フゝ、何なんだい、見みつともない、鳩はとが
 ゐるんだ。梅「へえゝ豆をやるのは是これですか……鳩はとがお辞儀じぎをし
 て居ゐますよ。近「なに豆を喰くつてゐるんだ。梅「異ちがつたのが居をり
 ますね、頭あたまの赤あかい。近「あれは鶏にはとり鳥どりだ……ま此方こつちへお出いで、こゝ
 がお堂だうだ。梅「へえゝ成程なるほど、十八間けん四面めんとは聞いてゐましたが、
 立派りつぱなもんですな。近「さ此この段だん々／＼を昇のぼるんだ。梅「へえ何
 だか何どうも滅茶めちやでげすな……おゝゝ大層たいさう絵双紙ゑさうしが献あがつてゐま
 すな。近「額がくだアな、此方こつちへお出いで、こゝで抹香まつかうを供あげるんだ、
 是これがお堂だうだよ。梅「へえゝ是これが観くわんおん音んさまで……これは何なんで。

近「お賽銭箱だ。梅「成程先刻も薬師さまで見ましたが、薬師さまより観音さまの方が工面が宜いと見えてお賽銭箱が大きい……南無大慈大悲の観世音菩薩、今日図らず両眼明かに相成りましてございます、誠に有難き仕合に存じます……」。

近「梅喜さん、此方へお出でよ。梅「へえ……こゝに大層人が立つてゐますな。近「なに彼りやア此方の人が映るんだ、向うに大きな姿見が立つてゐるのさ。梅「此方の人が向うへ……（前後を見返り）え成程近江屋さん貴方が向うに立つてゐますな、成程能く似てゐますこと。近「似てゐる筈よ、鏡へ映るんだから、並んで見えるだらう。梅「私は何方で。近「何方だツて二人並んで居るだらう。梅「へえ……。首を動かし見て、「成

程此方どこちで首を振るやうに向うでも振り、舌したを出せば彼方あつちでも出
 しますな。近「止よしねえ、見みつともねえから。梅「ム、ウ私は随わたしずるぶ
 分んい好い男をとこですな。近「ウン……。梅「私は此わたしこの位くらゐな器きり量やうを持も
 つてゐながら、家内かないは鎧よろひ橋ばしで味噌みそ漉こしを提さげて往いつた下婢をんなより
 悪いとは、ちよいと鬱ふさぎますなア。近「其様そんなことを云いつたつて
 為しやうがない、さアこゝは奥山おくやまだ。梅「へえ……。ときよろ／
 としてゐる中に、近江屋あふみやの旦那だんなを見失みはぐつてしまひました。梅「金き
 兵衛んべゑさアん……。近江屋あふみやさアん……。と大きな声こゑを出して山中やまぢうへ
 鳴り歩なきます中に、田圃たんぼの出口でぐちの掛茶屋かけちやに腰を掛かけて居ゐました
 女をんなは芳町よしちやう辺へんの芸妓げいしやと見えて、お参まゐりに来たのだから余あまり好よ
 い装なりでは有ありません、南部なんぶの藍あゐの萬筋まんすぢの小袖こそでに、黒縮緬くろちりめんの羽は

織おり、唐たうじゆす繻子おびの帯を〆《し》め、小さい絹張きぬばりの蝙蝠傘かうもりがきを傍そばに
 置き、後丸あとまるののめりに本天ほんてんの鼻緒はなをのすがつた駒下駄こまげたを履はいた
 小粋こいきな婦人ふじんが、女「ちよいと梅喜ばいきさん、ちよいと。梅「へえへえ
 何処どこウ……（彼方あちら此方こちらを見廻みまはす）女「何なんだよう、私が先刻わたしから見
 てゐると、お前まへがこゝを往いつたり来きたりしてゐるが、眼めが開あいて
 居ゐるから能よく似にた人が有あると思おもつてゐたら、矢張やつぱり梅喜ばいきさんなん
 だよ、ま何どうしたえ。梅「へえ、今日けふ眼めが開あきました。女「眼めが
 開あいたえ……だから馬鹿ばかには出来できないものだよ、本ほん当たうに神かみさま
 の御利益ごりやくだよ、併しかしまア見違みちがへるやうな好い男をとこになつたよ。梅
 「へえ、あなたは何処どこのお方かたで。女「いやだよ、大たい概がい声こゑでも知
 れさうなもんだアね、小春こはるだよ。梅「え……小春姐こはるねえさんで、成な

程……美しいもんですなア。小春「いやだよ、大概におし。

梅「へへ、お初にお目に懸りました。小春「何だね、お初ウなん

て。梅「いえ、お顔を見るのはお初ウで。小春「お前は眼が開い

てちよいと子柄を上げたよ、本當にまア見違いちまつたよ、一

人で来たのかい、なに近江屋の旦那を、ム、失れて、然うかい、

ぢやア何処かで御飯を食べたいが、惣ざい料理もごたくするし、

おんも重りする処も忌だし、あゝ釣堀の師匠の処へ往かうぢやアな

いか。梅「へえ、釣堀さまとは。小「何だね釣堀だね。梅

「有難い……私は二十一日御飯を食べないので、腹の空つたの

が通り過ぎた位なので、小「ぢやア合乗りで往かう。と是から釣

堀へまゐりますと、男女の二人連ゆゑ先方でも氣を利か

して小間へ通して、蜆のお汁、お芋の 転がしで一猪口出ました。小「さ、お喫べよ、お前の目が開いて芽出度いからお祝ひだよ、私がお酌をして上げよう……お猪口は其処に有らアね。梅「へえ、是がお猪口……ウンナ……手には持慣けて居ますが、巧く出来てるもんですな、へへ、是はお徳利、成程此中からお酒が出るんで、面白もんですな。小「何だよ、猪口の中へ指を突つ込んでサ、もう眼が開いて居るから、お酒の覆れる氣遣ひはないは。梅「へへ、不斷やりつけてるもんですから……（一口飲んで猪口を下に置き）有難う存じます、どうも……。小「冷ない中にお吸ひよ、お碗を。梅「へえ是がお碗で……お箸は……これですか、成程巧く出来て居ますな……ズル／＼ズル／

〵（汗を吸ふ音）ウン結構でございます……が、どうも力強く
 つて……。小「ホ、いやだよ此人は、蜷の貝ごと食べてさ……
 あれさお刺身をおかつこみでないよ。梅「へえ……あゝ、好い心
 持になつた。と漸々、盞がまはつて参るに従つて、二人とも
 眼の縁ほんのり桜色となりました。小「梅喜さん、本當に
 お前男、振を上げたよ。梅「へえ私は随分好い男で、先刻鏡
 でよく見ましたが。小「お前に去年私が寸白で引いてゐる時分、
 宅へ療治に来たに、梅喜さんの療治は下手だが、何処か親切で
 彼様な実の有る人はないツて、宅の小梅が大変お前に岡惚れを
 してゐたよ、あれで眼が有つたら何うだらうと云つたが、眼が開
 いたから誰でも惚れるよ、私は本當に岡惚れをしたワ。梅「えへ

〃〃〃 冗談 じようだん 云つちやアいけません、盲人 めくら にからかつちやア困
 ります。小「盲目 めくら だつて眼 め が開いたぢやアないか、冗談 じようだん なし
 に月々 つき／＼ 一度位 どくらゐ づゝ遊んでおくれな、え梅喜 ばいき さん。梅「あなた、
 そりやア本当でげすかい。小「本当にも嘘 うそ にも女の口から此様 こん な
 ことを云 い ひ出すからにやア一生懸命だよ。梅「え……本 ほん 当 とう なれば
 私 わたし ア嬢 あ を追ひ出しちまひます、へえ 鎧 よろひ 橋 はし の味噌 みそ 漉 こ 提 し げより醜 わる
 いてえひどい顔で、直 す ぐにさらけだしちまひます、あなたと三日 か
 でも宜 い いから一緒 しよ に成 な り度 た いね。と云 い つて居 を りますと、突 いきなり 然 しろ 後
 の襖 ふすま をがらりと開 あ けて這 はい 入 い って来 き た婦 ふじん 人 い が怒 いか りの声 こゑ にて、婦 ふ 人
 「何 なん だとえ。梅「え……何 どこ 処 ひと の人 ひと だえ。婦 ふ 人 ひと 「何 どこ 処 ひと の人 ひと だつて、
 お前 まへ の女 にようばう 房 たけ のお竹 たけ だよ。梅「お竹 たけ え……是 これ はどうも……。竹

「何だ^{なん}とえ、今^{いま}聞いてゐれば、彼奴^{あいつ}の顔は此^こんなだとか彼^あんなだ
 とかでいけないから、さらけだしてしまひ、小春姐^{こはるねえ}さんと夫婦^{ふうふ}
 に成^ならうと宜^よく云^いつたな、お前^{まへ}其様なことが云^いはれた義理^{ぎり}かえ、
 いはたや^{いはたや} 旦那^{だんな}に連^つれられて浜^{はま}へ往^いつて、松^{まつ}さんと喧^{けん}嘩^{くわ}アして帰^{かへ}
 岩田屋^{いわたや}の旦那^{だんな}に連^つれられて、
 つて来^きた時^{とき}に何^{なん}とお云^いひだえ、あゝ口惜^{くや}しい、真実^{しんじつ}の兄^{きやう}弟^{だい}
 にまで置^{おき}去^やりにされ^るのも己^{おれ}の眼^めが悪^{わる}いばかりだ、お竹^{たけ}や何卒^{どうぞ}一^{いっ}
 方^たでも宜^いいから明^あけてくれ、どうか工然^{さう}して薄^{うす}くも見^みえるやう
 にして呉^くれと云^いふから、私^{わたし}も医^い者^{しや}ぢやアなし、お前^{まへ}の眼^めを明^あけや
 うはないが、夫^{それ}程^{ほど}に思^{おも}ふなら定^{さだ}めし口惜^{くや}しかつたらう、何^どうか
 して薄^{うす}くとも見^みえるやうにして上^あげたいと思^{おも}つて、茅場^{かやばちやう}町の薬^や
 師^{くし}さまへ願^{ぐわん}掛^がけをして、私^{わたし}は手探^{てさぐ}りでも御飯^{ごぜん}ぐらゐは炊^たけます

から、私の眼を潰しても梅喜さんの眼を明けて下さるやう、御利
 益を偏へに願ひますと無理な願掛けをして、寿命を三年縮
 めたので、お前の眼が開いたのは二十一日目の満願ぢやアな
 いか、私は今朝眼が覚めてふと見ると、四辺が見えないんだよ、
 はてな……私の眼が潰れたか知らん、私が見えなければきつと梅
 喜さんの眼が開いたらう、それとも無理な願掛けを為たから私
 へ罰が中つて眼が潰れたのかと思つて、おどくしてゐる所へ、
 近江屋の旦那が歸つて来て、梅喜の眼が開いたから浅草へ連れ
 て往つたが、奥山で見失つたけれども、眼が開いたから別に負
 傷はないから安心して居たと云はれた時には、私は本当に飛立つ
 程に嬉しく、自分の眼が潰れた事も思はないでサ、早くお前に遇

このこと

つて此事を聞かしたいと思つたから、お前の空杖を突いて方

う／＼さが

々 探して歩くと、彼処の茶店で稍く釣堀へ往つたといふ事

が解つたから、こゝへ来てもお前の女房とは云はない。只梅

いき

喜さんに遇ひたうございます。何卒遇はしておくんなさいまし、

わたしをんなあんま

私は女按摩でお療治にまゐりましたと云つたら、按摩さんなら

こゝ

茲においで、今お酒が始まつて居るからと云ふので、私は次の間

ゐ

に居るとも知らず、お前は眼が開いたと思つて宜くのめのめと増

うちやう

長 して私を出すと云つたね。梅喜は天窓を両手で押へ、梅

わたし

「はあア誠に面目次第もない、お前が次の間に居やうとは知ら

にようばう

ず、誠に済まない……。女房は暫く泣伏し涙を拭ひつゝ、竹

あき

「どうも本当に呆れちまつたね、私は死にます……。何を押へるん

わたし

なに おき

だ、放^{はな}しておくれ。と止める手先^{てさき}を振切^{ふりき}つて戸外^{そと}へ出る途端^{とたん}に、
 感が悪いから池の中へずぶり陥^{はま}りました。梅「おゝ……お竹やゝ
 」。竹「何^{なん}だよ、しつかりお為^しよ、梅喜^{ばいき}さんく、お起^おきよ。と
 揺^ゆり起^{おこ}され、欠伸^{あくび}をしながら手先^{てさき}を搔^かき、梅「ハア……おや燈^あ
 火^{かり}を消したかえ。竹「何^{なに}を云^いふんだね、しつかりおしよ、お前^{まへ}何^{なに}
 か夢でも見たのかえ、額^{ひたひ}へ汗をかいてゝさ。梅「へえ……お前^{まへ}
 は誰^{だれ}だえ。竹「ホゝ、何^{なん}だよ、お竹^{たけ}だアね。梅「こゝは釣堀^{つりぼり}か
 い。竹「何^{なん}だね、宅^{うち}に寐^ねて居^あるんだよ、お前^{まへ}寐^ね耄^ぼけたね、何^どうか
 夢でも見たんだよ。梅「あ……夢かア、おやゝ盲人^{めくら}てえものは
 妙^{めう}な者^{もん}だなア、寐^ねてゐる中^{うち}には種々^{いろく}のものが見えたが、眼^めが醒^さめ
 たら何^{なに}も見えない。……心眼^{しんがん}と云^いふお話^{おはなし}でございます。

（拋酒井昇造筆記）

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年8月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心眼

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>